宇宙と預言者達

——アブー・ハーティム・アッ・ラーズィーの

『訂正の書』における預言者論——

The Cosmos and the Prophets

——The Prophetology in *The Book of Correction*(Kitāb al-*Islāh*) by Abū Ḥatim al-Rāzī——野 元 晋^{*}
NOMOTO Shin

ABSTRACT This paper aims at elucidating how the idea of correspondence between the existent beings in the cosmos was discussed in early Ismā'ilism, especially with regard to the doctrine of the seven enunciator-prophets (*nuṭaqā'*, sdg. *nāṭiq*). For this purpose we analyze a chapter on the fourth *nāṭiq*, Moses (Mūsā), which deals with our subject, from the still unedited text *Kitāb al-Islāh*, or *The Book of Correction*, written by a Neoplatonist-inclined thinker, Abū Ḥatim al-Rāzī (d. 322/934-5), as an attack on his coreligionist Muḥammad al-Nasafi (d. 332/942).

According to al-Rāzī, al-Nasafi holds that the fourth *nāṭiq* has the perfectness of the number four just as the sun, the fourth astral body, has it. Refuting this, al-Rāzī asserts that the real holder of the “fourness” (*arba'iyah*) is the seventh *nāṭiq*, Qā'im, who discloses the inner meaning of all the sacred laws of his six predecessor-*nuṭaqā'*. In order to establish his argument, al-Rāzī cites some examples of the correspondence between the seven *nuṭaqā'* and some beings from the world of nature in the cosmos such as the seven days of the week, the seven parts of the human body and the seven dyeing colours (*aṣbāgh*): just at each member of these groups in the world of nature takes its role in the development of its own group, each *nāṭiq* takes his own role in the development of the history of human kind. This implies that in the cases of both nature and the seven *nuṭaqā'* the last phase of development is the most perfect. Thus, al-Rāzī's own argument shows us another example of

* 慶応義塾大学言語文化研究所助手

Instructor, Institute of Cultural and Linguistic Studies, Keio University

the early Ismā'īlis' utilization of the knowledge of nature and the natural sciences of their time, as is pointed out by P. E. Walker in the case of Abū Ya'qūb al-Sijistānī. Our research in the future should seek out other examples of this practice among other Ismā'īlī thinkers.

1. 序 論

宇宙の様々な存在者の間、またそれらと人間の間に神秘的な照応関係があるとする思想は古典期から中世期における近代以前のイスラーム思想で大きな影響力を持っていたと指摘されている。たがこの様な思想はイスマエール派の諸著作において同派の教義とどの様に関係して現れるのであろうか。⁽¹⁾本稿ではこの派で新プラトン主義哲学の影響下において纏められた現在知られる限り最古の著作、アブー・ハーティム・アッ・ラーズィー Abū Ḥatīm al-Rāzī (322/934-5年歿)⁽²⁾の『訂正の書』*Kitāb al-Iṣlāḥ* からの預言者モーセ Mūsā についての章がこの問題を論じているのに注目し、この一章を中心にイスマエール派の教義のうちその根幹をなす預言者論と宇宙の人間を含む諸存在間に照応関係を見出す思想が如何に関連づけられたかを論ずる。

さて『訂正の書』は四／十世紀というイスマエール派の政治的活動・知的運動の両分野における勃興期に成立し、同派のやはり最初期の哲学者、ムハンマド・アン・ナサフィーの Muḥammad al-Nasafi (332/942年歿)の現在は散逸した『産出の書』*Kitāb al-Maḥṣūl*⁽⁴⁾の宇宙論・人間論・靈魂論・預言者論に批判を加えたもので、その後アブー・ヤアクブ・アッ・シジスターニー Abū Ya'qūb al-Sijistānī (四／十世紀)やハミード・アッ・ディーン・アル・キルマーニー Ḥamid al-Dīn al-Kirmānī (441/1020年歿)によって続けられた教義論争の端緒となった。⁽⁵⁾このテキストは現在未校訂のままであり、その内容の全体は1950年代に W. Ivanow が極く短い形で紹介しており、また近年では P. E. Walker がテキスト冒頭近くの哲学的宇宙論・靈魂論・人間論を扱った部分を細かく分析し、これらの論争の内容を新プラトン主義の文脈から明らかにしている。⁽⁶⁾だがテキストの大部分を占める預言者論全体については、Ivanow 以後は、S. M. Stern, W. Madelung, H. Halm によるその極く一部の研究を除けば、詳細なモノグラフ的研究は未だになされていない。それ故預言者論の一部を扱うことでイスマエール派研究の空隙を僅かでも埋めることも本稿の目的とする。⁽⁷⁾⁽⁸⁾

2. 『訂正の書』におけるモーセの章

この『訂正の書』は前述の様々な論題をめぐって、ナサフィーの説が引用され、それについてラーズィーが批判を加えるという形式をとっている。テキストは冒頭と結尾を

欠いた不完全な五部構成をとった形で現在まで伝わっており、本稿が扱う預言者モーセを扱った章は、第四部の最初の章であり、「第四代告知者についての〔ナサフィーの〕説の章」(bāb al-qawl fi rābi' al-nuṭaqā', pp.198-231/pp.198-231)と題されている。⁽⁹⁾この「告知者」と訳し、または「語る者」とも訳せる術語“nāṭiq”(複数形が nuṭaqā'である)はイスマール派において人類の歴史上七人次々と現れ、最後の一人を除き宗教の外的側面(ẓāhir)をなす聖法(shari'ah)をもたらず大預言者をさし、彼ら一人一人がそれぞれの時代、「周期」(dawr)を開くとされる。⁽¹⁰⁾モーセはこのうちでは第四代告知者にあたるのであるが、この章では彼の具体的な事蹟を殆どとりあげられない。⁽¹¹⁾

さてラーズィーのテキストは、次の様に第四代告知者の有する性格を「四」の数から、更にはその性格づけを自然世界の存在者、第四の天体としての太陽(諸天体の順序:土・木・火・太陽・金・水・月)⁽¹²⁾から説明するナサフィーの説の引用から始まる。

第四代告知者については、彼は告知者達のうちでは誰も完成し得なかったこと、つまり〔神の〕「御言葉」の顕現(ẓuhūr al-kalimah)⁽¹³⁾が彼のために完成したのだ。これは時の助け(musā'adat al-zamān)によって彼が「四」の位階(ḥadd al-arba'ah)を得たためである。それはつまり四人目(al-rābi')は絶対的に諸位階の中で最も完成した者(atamm al-ḥudūd)であるからだ。それはまた太陽が第四の天球(al-falak al-rābi')にあって諸天体とそれらの光りの中でうちで最も完成したものの(atamm al-nujūm wa-anwāri-hā)であるからだ……(pp.198-99/p.198)

この説の意味するところはラーズィーが引用した部分を読む限りでは、「四」の数字の完成性から、第四告知者も太陽によって表される完成性を持つということと考えられる。また「四」という数の単位は四元素・四つの季節・四つの体液・東西南北の四方位など自然の中に照応する存在が多く見出されたことから、近代以前のイスラームの数をめぐる象徴論において重く見られ、ラーズィーも四つの元素(写本では al-ummahāt al-arba'ah, 正しくは arba')が集まったときに新しい存在が生成することを例に挙げ、四の数の単位の自然世界における重要性を認める⁽¹⁴⁾(p.199/p.200)。⁽¹⁵⁾だが、以下で見る様に上の言説をこの四の数の重要性を直接的に告知者間の問題の議論に適用し、第四告知者が第五告知者であるイエス 'Īsā, 第六告知者である預言者ムハンマド、さらには第七告知者、カーイム Qā'im に優越していることを主張していると理解した上で、ナサフィーの説を、自分の預言者理論を明らかにしつつ、反駁する。

まずクルアーン第23章第12節「我々は人間をまず土(tin)から創造し」を引用し、以下に続く13-14節の人間の発生を七段階に分けた叙述を暗示しつつ、この発生段階と等

しく第五代、第六代の告知者、ひいては第七代告知者が第四代告知者に優超した位階を持つことを示す (p.201/pp.200-1)。またラーズィーは、週の曜日では集団礼拝日である六日目 (yawm al-jum‘ah, 金曜), 更に七日目 (al-sabt, 土曜) は四日目 (al-arbi‘a, 水曜) よりも卓越性 (faḍīlah) において優るという例を挙げて (pp.203-4/p.203), 七つの天体中の太陽の様な第四番目の存在が最も優れたものであるということが、宇宙中の存在の全てに当てはまらないことを示す。そして告知者達の内では、第四代の者が第五代、第六代、第七代よりも劣るとするのである。

3. 預言者達の使命

以下の議論でラーズィーは、更なるナサフィー反駁のために第四代告知者の使命を彼独自の観点から定める。まず六人の告知者達を三人ずつ二つのグループ (最初の三人が「告知における最初の人々」(awwaliyūn bi-al-nuṭq), 次の三人が「終わりの人々」(ākhiriyūn)) と分け、第一のグループの告知者達は聖法をそれぞれ下し、第二のグループの告知者達は、前者が下した聖法を実現し更新する使命を持つとする (pp.205, 208 /pp.205, 208)。ここから第四代告知者については次の様に述べる。

第四の者 (第四代告知者) が現れたときに、彼は第一の者 (第一代告知者) の聖法とその規則の実行を繰り返し、その実行を規則の様々な増加によって確かなものとする。かくして告知と更新 (tajdid) のうち彼が受けるもの (hiṣṣu-hu) とは聖法の再確立 (i‘ādat al-shari‘ah) とかの〔聖法の規則の〕増加である。そして彼 (第四代告知者) は新しい聖法はもたらさぬが、第一代告知者の〔もたらした〕諸規則を再び確立し、それらを更新するのである。 (p.205/p.205-6)

つまり第四代告知者の使命は第一代告知者の聖法を更新することにある。以下同様に第五告知者は第二代告知者の聖法を更新し、第六代告知者は第三代告知者の聖法を更新することとなる。

以上の様に告知者達を二つのグループに分類した後、ラーズィーはイスマーイール派の最古の宇宙論でいう宇宙創世のものともなった七文字 KWNYQDR (「高次の七文字」 al-ḥurūf al-‘ulwiya hal-sab‘ah ともいい、Kūni-Qadar と読む) に目を向け、この文字一つ一つがそれぞれ告知者の一人一人に照応するという神聖文字論を援用し、第七代告知者の優越性を論ずる⁽¹⁷⁾。この七文字で女性原理としての四文字 KWNY (“Kūni”, 女性単数に対する命令「在れ!」) からの男性原理としての三文字 QDR (“Qadar”, 「運命」)⁽¹⁸⁾ が生成する如く、ラーズィーは第一グループの三人の告知者達から第二グループの三人

が発出するといひ、また聖法も前者がもたらしたものから後者の聖法が「派生する」といふ。そしてラーズィーは KWNV のそれぞれの文字に第一グループの各告知者、また QDR のそれぞれの文字に第二グループの各告知者を一文字ずつあてはめるのだが、ここで第一グループから最後の一文字、つまり四文字目の Y のみが残され孤立してしま⁽¹⁹⁾う。ラーズィーはここに文字 Y の独自の位置を認め、この文字を第七代告知者であるカーイムに結びつける。カーイムも自身は聖法をもたらさぬがすべての聖法の隠れた意味を明るみに出す「開示」(kashf) という特別な使命の故に他の告知者達から孤立し特別な地位を持つからである (以上 pp.206-208/pp.206-208)。この議論を次の様にラーズィーは結論づける。

第四の文字はそれら (文字) のうちの四番目である。またそれはその前に三つ [の文字] があり、後に三つ [の文字] が来るのでそれらの間で真ん中 [の文字] となる。そこでそれはそれらすべての七番目となる。というのはそれは第七周期の主 (ṣāhib al-dawr al-sābi') のためにとっておかれたものであり、他の文字と対にならぬからである。 (p.211/p.212)

つまり四番目の文字は七番目となるのであり、これと照応して第七代告知者は六人の告知者からなる「三つの対」(al-azwāj al-thalāthah) の後に来る四人目 (rābi') であるともいふ (p.211/p.212)。更に第七代告知者は最初の三人の告知者がもたらし、後の三人が更新した「三つの聖法」に封印をする四人目であると述べ (p.212/p.212)、これによって諸聖法の内に隠された意味・究極の真理を明らかにし新たな聖法をもたらさないというカーイムの使命を確認するのである。

4. 自然的世界の諸存在と告知者達

さてラーズィーは以上に見た様な告知者達が聖法をもたらし、更に別の告知者達がそれを更新するという関係は、小宇宙 (al-'ālam al-ṣaghir) である人間にその照応するものを見出す (p.213/p.213)⁽²¹⁾。というのはラーズィーの人間観によれば神は宇宙における自分への様々な「証しの全て」(al-shawāhid kullu-hā) の「集まる処」(majma') として人間を創造し (p.213/p.213)、また人間は己の内に宇宙の全ての部分 (jami' ajzā' al-'ālam) を含み、宇宙の創造の頂点にある「宇宙の果実」(thamarat al-'ālam) である (p.215/p.215)⁽²²⁾ からである。ここから告知者達も彼らの諸聖法も自然世界にある人間の身体の中にそれに照応するものを持つという論理が導き出される。

そこでラーズィーは各告知者は人間の身体の様々な部分にそれぞれ対応する箇所を持

つとする。つまり人間の身体を二本の足 (rijlān)・腹部 (jawf)・二本の足 (yadān)・頭部 (ra's) の六つの部分に分け、それらは右足は第一代告知者アダム、左足は第二代のノア、腹部は第三代のアブラハム、右手は第四代のモーセ、左手は第五代のイエス、頭部は第六代の預言者ムハンマドに対応するとする (以上 pp.213-14/pp.213-14)。そして第一代告知者と第四代告知者が同じ右側のそれぞれ足と手に対応することは、後者が前者の聖法とともに現れることを示し、また同様に第二代告知者と第五代告知者が同じ左側のそれぞれ足と手に対応することは、やはり後者が前者の聖法とともに現れることを示すという。またラーズィーは腹部と頭部はそれぞれ両足と両手を統べるが、これは第六代の預言者ムハンマド (頭に対応) が第三代のアブラハムの聖法とともに現れることを示すとする (pp.214-15/p.215)。この議論は、前に見た告知者達の第一のグループが聖法をもたらし、第二のグループがそれを更新するという関係を身体の各部の位置関係になぞらえたものであると考えられる。

またラーズィーは第七代告知者に対する身体の部分としては他の六つの部分にその生命 (ḥayātu-hā) を賦与する「第七の実体」(al-jawhar al-sābi') なるものを挙げる。この「第七の実体」の働きに照応するのが、第七代告知者が聖法の秘教的解釈の終極 (nihāyat al-ta'wil) とし六つの聖法の内に隠れた内的真理を秘教的解釈 (ta'wil) によって最終的な形で明らかにする役割である (pp.214, 217/pp.213, 217)。次にラーズィーは再び人間の発生の例を引き、人間は母の胎内で両足から最初に形成され、最後に出来る頭から外界に出ていくこととし、この例を最初の二人の告知者達によって二つの聖法がもたらされ、預言者ムハンマドによって聖法が完成し (yatammu), 完全なるものとなる (yakmalu) 譬えとする (p.218/p.218⁽²³⁾)。

更にラーズィーは人間の身体の各部分にふれた後に、染色の様々な色 (aṣbāgh) に言及し、泥色 (kudrah), 青色 (zurqah), 緑色 (khuḍrah), 赤色 (ḥumrah), 黄色 (ṣufrāh), 黒色 (sawād) と神は六色創造したとする。これらはそれぞれ第一代から第六代の告知者がもたらす聖法に照応するのである。そして後の三色、青、赤、黒はそれぞれ泥、黄、緑という最初の三色から生じたものとして、最初の三つの聖法の更新という形をとって後の三つの聖法が成立したことの譬えとなる (pp.219-20/pp.218-20)。そして最後の黒色は「全ての色の終極」、「何の色も受けつけず、全ての色を消す」のであり、これと同様に第六代告知者の聖法の後には聖法は何もなくなる。これとは対照的なものは次の色として新しく来る白であり、全ての色がそこから始まる「第一の色」(al-lawn al-awwal) とも言われるが、これは聖法ではなく秘教的解釈の色である。ここから聖法とそれが定めた義務としての行為 ('amal) の時代は預言者ムハンマドとその聖法によって終わり、第七代告知者カーイムによって秘教的解釈の時代が始まることが示

唆される（以上 pp.220-21/pp.220-21）。これはカーイムが人類の歴史を新しい段階へ導くことをさし、またシジスターニーのいう聖法の下に内的真理が隠された「隠蔽の周期」（dawr al-satr）から真理が明らかにされる「開示の周期」（dawr al-kashf）へと歴史が移行するということをさすと考えられる。⁽²⁴⁾

上の人間身体の一部、色に加えて、更なる自然世界の存在者の例として、上で見た「三つの対」の告知者達と諸聖法に対応するそれぞれの名が特定されていない「三つの元素」（写本では al-ustuquṣṣāt al-thalāthah、正しくは ustuquṣṣāt）が、前述の第七人目としての「第四の者」に対応する「エーテル」（athir）が挙げられる。この「エーテル」については、ラーズィーは天体をつくる第五の元素というアリストテレスの自然学本来の意味とは⁽²⁵⁾かなり異なる説明をしている。即ち彼によれば、この「エーテル」は、「三つの元素」よりも微細なものであり、それらと混合（muzāwij）して一体化し、それらの「元素」を己れと同じ様なものとする。それはちょうど火が石・木・鉄などを熱し一体となり、火として燃焼させる様なものである（以上 pp. 223-25/pp. 222-24）。そして「エーテル」及び火が他のすべての元素と一体になる様に、「第四の者」、つまり第七代告知者の行う秘教的解釈は、後の三人の告知者達が更新する形でもたらした「三つの聖法」の全てに、それぞれ様々な行為（断食・巡礼・犠牲祭等）を外面的には異なる形で定めているにもかかわらず、その内的な意味を明らかにすべく適用することが出来る（p.225/p.225）。⁽²⁶⁾

ラーズィーは次いで結論へと向う。第七代告知者は秘教的解釈という権能を持つが、これは彼に至って完全な形で現れる前に、可能態において（bi-al-qūwah）第四代告知者の「基礎者」（asās）のうちに現れたのである。基礎者とは各告知者に一人ずつ現れ、その聖法を解釈し、その時代にあって宗教の内的な（bāṭin）教えの基礎をうちたてる役割を持つ。⁽²⁷⁾この第四代告知者の基礎者が秘教的解釈の権能を持つがまだそれは完全ではなく、可能態における四人目なのである。これに対して諸聖法の意味を告知者達の最後の者として明らかにする使命を持ち、新たな周期を開く第七代告知者こそが、七人目だが重要な数の性質を真に持つ者であり、それ故に「現実態における解釈及び諸真理の終極（nihāyat al-ta'wil wa-al-ḥaqā'iq bi-al-fi'l）」である七人目の者こそが真の意味で四人目となる（以上 pp.229-30/p.229）。

5. 結びに代えて

これまで見てきたラーズィーの論考では、自然世界の諸存在同士、またはそれらと人間の間に見出される照応関係が告知者達、または彼らがもたらし更新する聖法の間に見出され、その様々の例がイスマーイール派が見る七人の告知者達による人間の歴史の展

開を説明するために引かれている。いわばこの論は、宇宙では自然世界において働く法則と同様の法則が、告知者達の世界、つまり宗教的世界にも働くという論理⁽²⁸⁾によって、胎内で形成される人間の身体、また色、エーテルと「三つの元素」という幾つかの自然世界の諸存在は新しい段階、また新しい存在へと発展していく様に、人間の歴史もカーイムの出現をその頂点とすべく展開していくと説明しているのである。このラーズィーが展開した議論を、カーイムをその終極とする救済史、そして預言者論の教義の説明⁽²⁹⁾への自然学、また宇宙内の諸存在の照応を説く自然哲学の利用と呼ぶことができる。

さてラーズィーの論考の主題、誰が四の数の真の性質を持つかという議論ではそれは第四代告知者であるとするナサフイーの説に対して、ラーズィーはそれは諸聖法の真の意味を最終的に明らかにする第七代告知者であるとした。ここで第四の天体としての太陽の他天体への優越、またラーズィーも引く四元素の新しい存在の生成にあたっての働きなど、「四」の単位の世界における他の数に対する優越性の法則が宗教的世界にそのまま適用されるとしたナサフイーの説へラーズィーが反駁したと考えることができる。しかしこのことはナサフイーが真に第四代告知者が他の告知者に対して卓越した存在であったと考えていたかは『産出の書』が現存していないので確認できず、可能性のみとして指摘できるであろう。だがラーズィーの論考には四の数の重要性を七人の告知者の理論に従属させようという試みが見られるので、ここで見る限りは自然学、自然哲学に対してイニシアティヴをとっているのはイスマーイール派の教義の様である。これはイスマーイール派思想家における自然の知識と同派の教義の関係で、前者が後者に従属している一例であると言える。しかしこの自然の知識、ひいては哲学が教義に従属しているという関係が、新プラトン主義などギリシャ起源の哲学の影響を受けたイスマーイール派思想家達のあらゆる哲学的思想表現において一般的であったという結論を下す⁽³⁰⁾には、更なる探究が必要となろう。

注

- (1) 'A. al-'Azmeḥ, *Arabic Thought and Islamic Societies* (London, 1986) の第二章 "Metaphysical Foundations, 2: Relations of Creation, Sympathy and Analogy," pp.55-105 を見よ。なおこの思想の具体的な例としては、大宇宙 (al-'ālam al-kabir) と小宇宙 (al-'ālam al-saghir) との間にそれぞれの部分の間の照応関係を認める理論があるが、これについては例えば次の研究を見よ。S. H. Nasr, *An Introduction to Islami Cosmological Doctriens*, revised ed. (London, 1978), pp.66-74; M. Takeshita, "Microcosmos and Macrocosm in Islamic Thought," chapter 2 in *Ibn 'Arabi's Theory of the Perfect Man and its Place in the History of Islamic Thought* (Tokyo, 1987); J. C. Bürgel, *The Feather of Simurgh: the*

“*Licit Magic*” of the Arts in Medieval Islam (New York, 1988), pp.1-52.

- (2) 例えば最近の次の研究はイスマーイール派初期の思想家シジスターニーにおける大宇宙と小宇宙の照応の理論などについてとりあげている。P. E. Walker, *Early Philosophical Shiism: the Ismaili Neoplatonism of Abū Ya‘qūb al-Sijistānī* (Cambridge, 1993), pp.51, 107-8, 181 n.2.
- (3) アブー・ハーティム・アッ・ラーズィーの生涯とその『訂正の書』を含む著作については、例えば次の研究によって概観できる。H. Halm, “Abū Ḥātem Rāzī,” *Encyclopaedia Iranica*, ed. E. Yarshater (Costa Mesa, CA, 1982-), vol.1: p.315; I. K. Poonawala, *Biobibliography of Ismā‘īlī Literature* (Malibu, 1977), pp.36-39; S. M. Stern, “Abū Ḥātim al-Rāzī,” *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., ed. H. A. R. Gibb et al (Leiden/London, 1960-) (以下この版を *EI*² と略記する), vol.1: pp.264-66. なお本稿で使用した『訂正の書』の底本は Hamdani Collection (Milwaukee) の写本と Tübingen 大学写本 (MS VI 327) である。なお貴重な写本の使用を快諾して下さった A. Hamdani 教授 (Wisconsin 大学 Milwaukee 校) とそのコピーを再複製して下さった本稿の筆者の McGill 大学 (カナダ・モントリオール市) での前指導教授 P.E. Walker 博士にあつく御礼申し上げたい。
- (4) ナサフィーとその『産出の書』を初めとする著作には、次の研究によって概観できる。Poonawala, *Biobibliography*, pp.40-43; idem, “al-Nasafī, I, Abū’l-Ḥasan Muḥammad b. Aḥmad al-Bazdawī or al-Bazdahī,” *EI*², vol.7: p.968.
- (5) シジスターニー及びキルマーニーの生涯と彼らの著作については、Poonawala, *Biobibliography* より、それぞれ pp.82-91, pp.94-102, また Walker, “Abū Ya ‘qūb Sejestānī,” *Encyclopaedia Iranica*, vol.1: pp.396-98 及び J. T. P. de Bruijn, “al-Kirmānī, Ḥamid al-Dīn,” *EI*², vol.5: pp.166-67 から概観が得られる。またこの論争については W. Ivanow, “An Early Controversy in Ismailism,” chap. in *Studies in Early Persian Ismailism*, 2nd ed. (Bombay, 1955), pp.87-122 及び Walker, “The Debate on the Maḥṣūl” chap. in “Abū Ya‘qūb al-Sijistānī and the Development of Ismā‘īlī Neoplatonism” (Ph. D. diss, University of Chicago, 1974), pp.81-107: idem, *Early Philosophical Shiism*, pp.52-63 が纏めている。なお『訂正の書』*Kitāb al-Isḥāh* という題を The Book of Carrection と英訳したのは筆者の知る限り、ここで挙げた Ivanow による著作にあるものが最初である。
- (6) Ivanow, “An Early Controversy in Ismailism,” pp.91-94, 116-22.
- (7) Walker, *Early Philosophical Shiism*, pp.52-55; idem, “The Universal Soul and the Particular Soul in Ismā‘īlī Neoplatonism,” *Neoplatonism and Islamic Thought*, ed. P. Morewedge (Albany, NY, 1992), pp.149-66.
- (8) S. M. Stern, “Abū Ḥātim al-Rāzī on Persian Religion,” chap. in *Studies in Early Ismā‘īlism* (Jerusalem/Leiden, 1983), p.30-49; W. Madelung, “Das Imamāt in der frühen ismailitischen Lehre,” *Der Islam* 37 (1961), pp.101-14;

H. Halm, *Kosmologie und Heilslehre der frühen Ismā'iliya* (Wiesbaden, 1978), pp.60-62, 68-70, 134, etc.

- (9) なお Ivanow は第六部があるとその紹介のなかで挙げており (Ivanow, “An Early Controversy in Ismailism,” p.120), また Tübingen 写本においても p.311 で「第六部」(al-juz' al-sādis) が始まっている。だが 同写本と Hamdani 写本においてどこで第五部は始まったか明らかにされておらず、実質的には五部構成であると考えられ、不完全な五部構成をとっていると記した。またこれ以降は『訂正の書』から引用、またはその内容を紹介した箇所は最初に Hamdani 写本に記されたページ番号、次に Tübingen 写本に記されたページ番号を記し、括弧の中に入れ、本文中に挿入する。
- (10) Madelung, “Aspects of Ismā'ili Theology: the Prophetic Chain and the God beyond Being,” *Ismā'ili Contributions to Islamic Culture*, ed. S. H. Nasr (Tehran, 1977), pp.54-55; Halm, *Kosmologie und Heilslehre*, pp.18-37. なお本稿が用いた “nāṭiq” の訳語の「告知者」は H. Corbin, *Histoire de la philosophie islamique* (Paris, 1964) の邦訳書『イスラーム哲学史』黒田壽郎・柏木英彦訳 (岩波書店, 1974年), pp.106-7 が初めて用いたものである。
- (11) イスラームにおけるモーセ像については B. Heller, D. Macdonald, “Mūsā” *ET*² vol.7: pp.638-40 がある。
- (12) この諸天体の順序については, S. Diwald, *Arabische Philosophie und Wissenschaft in der Enzyklopadie, Kitāb Iḥwān aṣ-Ṣafā, (III), die Lehre von Seele und Intellekt* (Wiesbaden, 1975), p.66-8 にプラトン, アリストテレス以来の古代ギリシアの自然学及びメソポタミアなど古代中東の天文学から五/十一世紀に至るまでのイスラームの自然学の諸説が纏められている。また Abū Ma'sar, *Mukhtaṣar al-Madkhal in The Abbreviation of the Introduction to Astrology: together with the Mediaeval Latin Translation of Abelard of Bath* ed. & trans. Ch. Burnett, K. Yamamoto & M. Yano (Leiden, 1994) よりアラビア語テキスト p.14, 英訳 p.15 を参照。
- (13) この「御言葉」とはラーズィーの時代のイスマーイール派では、神が創造の際に発した「在れ!」という命令 (amr) の意味で使われることが多い術語である。Madelung, “Cosmogony and Cosmology: VI, In Ismā'ilism,” *Encyclopaedia Iranica*. vol.6: pp.322-26 参照。
- (14) イスラームにおける「四」の重要性の強調の諸例は、一般的なものとしては A. -M. Schimmel, *The Mystery of Numbers* (Oxford, 1993), pp.94, 96 に挙げられている。「四」の自然世界における重要性を強調した例としては四/十世紀にバスラに活動し、イスマーイール派との関係があったという指摘もある知識人達の秘密結社イフワーン・アッ・サファー Iḥwān al-Ṣafā' (純潔兄弟会) が挙げられ、テキストからは次の箇所はその例が見られる。*Rasā'il Iḥwān al-Ṣafā'* (Beirut, 1378A.

H./1975A. D.), vol.1: pp.51-54. また vol.3: pp.178-98 を参照。M. Fakhry, "Neo-Pythagoreanism and the Popularization of the Philosophical Sciences," chap. in *A History of Islamic Philosophy*, 2nd ed. (New York, 1983), pp.163-81; B. R. Goldstein, "A Treatise on Number Theory from a Tenth Century Arabic Source," *Centaurus* 10 (1964): pp.129-60 をも参照。

- (15) 自然世界において、四元素の集合から新しい存在が生成するというこの説は『訂正の書』の別の箇所 (pp.141-43/pp.138-40) でも見出される。なお、この箇所では「四つの性質」(al-ṭabā'i' al-arba') が四元素と同じ意味で使われていると考えられる。拙稿「初期イスマーイール派の他宗教観についての試論——Abū Ḥātim al-Rāzi (322/934-5 年歿) の『訂正の書』(*Kitāb al-Isḥāḥ*) からの一章に基づいて——」, 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第25号 (1993), pp.130-33, p. 141 n. 33 を参照のこと。
- (16) クルアーン第23章第13節から第14節は人間の発生段階を「土」とそれからとられた「滴」(nuṭfah), 「凝固した血」(‘alaqah), 「塊り」(muḍghah), 「骨」(‘izām), 「肉」(lahm), 「新しい被造物」(khalq ākhar) と七段階に分けたと読むことができる。このイメージを用い、それぞれの段階に告知者を一人ずつあてはめることによって、人間の歴史が第七代告知者の出現へ向けて次第に霊的な完成に向かうことを説いたのが、シジスターニーである。al-Sijistānī, *Ithbāt al-Nubūwāt*, ed. ‘A. Tāmīr (Beirut, 1982), pp.168. なおこのシジスターニーの人間発生による人類史発展のイメージを最初に指摘したのは次の研究である。Walker, "Eternal Cosmos and the Womb of History: Time in Early Ismaili Thought," *International Journal of Middle East Studies* 9 (1978): p.365.
- (17) 七つの文字 KWNYQDR を中心とした宇宙生成論については Stern, "The Earliest Cosmological Doctrines of Ismā‘ilism," chap. in *Studies in Early Ismā‘ilism*, pp.3-26; Halm, *Kosmologie und Heilslehre*, pp.53-66 が概観しており、また Halm の研究書には『訂正の書』の Kūnī-Qadar を扱った部分 (pp.205-207/pp.206-208) の独訳とコメントリーがあり (pp.60-62), 適宜参照した。なお Halm はこのラーズィーの KWNYQDR 論が第四代告知者の使命と「四人目」の地位をめぐる論争の文脈の内にあることには触れていない。
- (18) S. M. Stern が新プラトン主義の影響を受ける以前の宇宙論を最も忠実に反映しているものとするアブー・イーサー・アル・ムルシド Abū ‘Isā al-Murshid (四／十世紀) の論考では Kūnī が Qadar に先行し、また前者が後者を創造するとされる。Stern, "The Earliest Cosmological Doctrines" pp.8-9 (Stern 校訂のアラビア語テキスト), pp.19-20 (同じく Stern によるコメントリー)。しかし新プラトン主義の影響下にあったシジスターニーは、Qadar は神の命令から生まれた先行者 (sābiq, つまり新プラトン主義宇宙論での普遍的知性 ‘aql), Kūnī は次に来る後続者 (tālī, 普遍的魂 nafs) であるとするので、Kūnī と Qadar の優劣関係が逆転している。

al-Sijistāni, *Kitāb al-Iftikhār*, ed. M. Ghālib (Beirut, 1980), p.48. また Halm による *al-Iftikhār* のこの部分の独訳 (*Kosmologie und Heilslehre*, pp.53-54) も参照。

- (19) なおラーズィーの説は、K と W, N と Y, Q と D がそれぞれ「対になること」(izdiwāj) によって、R のみが孤立した文字となり、他の文字が神の創造の六日間を表すのに対し、R は創造がない最後の日を表すとするナサフィー説への反駁である。『訂正の書』p.206/p.206 を見よ。また Halm の独訳 (*Kosmologie und Heilslehre*, pp.60-61) をも参照。
- (20) 他の告知者達とは異なる第七代告知者の特別な役割については、例えば, Madelung, “Aspects of Ismā‘ili Theology,” p.55 が述べている。
- (21) また P. E. Walker は、ラーズィーはそのもう一つの著作 *Kitāb al-Zinah* において大宇宙と小宇宙の照応説が展開されているとしている。Walker, *Early Philosophical Shiism*, p.51. だが Walker が用いていると思われる Hamdani 写本は今回参照することが出来なかった。
- (22) ラーズィーは、『訂正の書』の他の箇所 (p.29/p.29) でもこの説を述べている。
- (23) またラーズィーはアラビア文字で書かれた預言者ムハンマドの名は「この世界の果実」である人間の身体の形姿を表すものだという (『訂正の書』p.215/pp.215-16)。W. Ivanow, “An Early Controversy,” p.118. 諸聖法の完成者である預言者ムハンマドの以前の告知者達にない特別な性格を表すものとも考えられる。
- (24) シジスターニーはアダム以降、人間の歴史は何の制約もなく真理だけが公けになっていた「開示の周期」から「隠蔽の周期」へ移行し、カーイムの出現によって「開示の周期」に入るという。al-Sijistāni, *Ithbāt*, pp.131, 183, also cf. p.181. ラーズィーもカーイムを「開示の周期の主」(ṣāhib dawr al-kashf) と呼んでいる (『訂正の書』p.213/p.213)。シジスターニーの主張については次の研究を参照した。Halm, *Kosmologie und Heilslehre*, pp.99-101; Walker, “Eternal Cosmos and the Womb of History,” pp.364-65; idem, *Early Philosophical Shiism*, pp.139-40.
- (25) S. Sambursky, *The Physical World of Late Antiquity* (London, 1962; reprint, London, 1982), pp.123-25.
- (26) この論はそれぞれの聖法はそれが定めた規定から外面上異なりながら、秘教的の解釈によって明らかにされる様な内的な真理において一致とするラーズィーの主張を基礎とすると考えられる。ラーズィーは『訂正の書』において「真の宗教 (al-dīn al-khālīṣ) は一なるものであり、そこに〔互いの〕相違はない」とし、また「彼ら (告知者達) の [もたらした] 諸聖法の外面 (ẓāhir sharā’i’i-him) の相違 (ikhtilāf) は彼らの間の相違 [を意味するもの] ではない、というのはそれらの意味 (ma’āni-hā) は一致するからである」という (p.72/p.69)。また Abū Ḥatīm al-Rāzī, *Al’lām al-Nubūwah*, ed. S. al-Sawī (Tehran, 1977), pp.166-67 参照。このラーズィーの主張について筆者の注意を喚起したのは次の研究である。H. Daiber, “Abū Ḥatīm

al-Rāzī on the Unity and Diversity of Religions,” *Dialogue and Syncretism: An Interdisciplinary Approach*, ed. J. Gort, H. Vroom, et al. (Amsterdam/Grand Rapid, Michigan, 1989), pp.95–6; Shamsuddin Talbani, “The Debate about Prophecy in “Kitāb A‘lām al-Nubūwah”: An Analytical Study” (M.A. Thesis, McGill University, Montreal, 1989), p.129.

(27) ラズビーは可能態における四人目は第四代告知者の聖法を解釈する権能を持った「基礎者」(asās)であるという(『訂正の書』, pp.229–30/pp.229)。「基礎者」とは各告知者の後に現れ、その聖法の内的意味を明らかにする役割を持ち、宗教の内的な(batin)部分を確立するのでこの術語を与えられている。また自分では聖法をもたらしえずに沈黙するために告知者(「語る者」)に対して「沈黙者」(ṣāmit)とも呼ばれ、また「権限実行者」(waṣī)とも呼ばれている。Madelung, “Aspects of Ismā‘ili Theology,” p.55. ラズビーの同時代のイスマーイール派にはモーセの「基礎者」はアロン Hārūn であったという共通の認識があったと考えられる。Ja‘far b. Maṣṣūr al-Yaman, *Sarā‘ir wa-Asrār al-Nuṭaqa’*, ed. M. Ghālib (Beirut, 1984), pp.166, 170; al-Qāḍī al-Nu‘mān, *Asās al-Ta’wīl*, ed. ‘A. Tāmīr (Beirut, 1960), p.223. また Halm, *Kosmologie und Heilslehre*, pp.28, 34 参照。

(28) つまり宇宙の中にある世界で見出される事象は他の世界でも同様の働きを見ることができるとし、諸世界をアナロジーの関係で結ぶ思惟がラズビーの思想に見られる。宇宙にアナロジーを見出す思惟の中世イスラーム思想における重要性については次の研究及び註1で挙げた研究が指摘している。P. Heath, *Allegory and Philosophy in Avicenna (Ibn Sīnā)* (Philadelphia, 1992), pp.179–82, 186–87, 189 n.26 and 27. また筆者は既に拙稿「初期イスマーイール派の他宗教観についての試論」p.134においてイスマーイール派におけるアナロジー的思惟の存在の可能性を指摘したが、ほぼ同時期に出版された Walker, *Early Philosophical Shiism*, pp.68–69 においてもシジスターニーの思想においてアナロジーを様々な世界に見出す宇宙論の存在が指摘されていた。

(29) Wakler, *ibid.* pp.145–56 参照。

(30) Walker はシジスターニーを中心とするイスマーイール派の研究から、自然学や哲学はその秘密主義的教義の説明のために奉仕するものであったという結論を導き出している。Walker, *ibid.* しかし教義自身も自然学や哲学をとりこむことで形成されたという可能性も否定できないであろう。